

♪ 2024年度 **poco a poco** ♪

Nr. 14 2024年11月21日(木)

文責:プファイル・辰巳

マルティン祭も終わり・・・

11月11日のマルティン祭(聖マルティンの善行を思いつつ、子どもたちの提灯行列や教会のお庭で焚火などが執り行われます。)が終わり、いよいよアドヴェント(クリスマスの4週間前、待降節)を待つばかりとなりました。2024年も大詰めに近づいてきましたね。中学部は期末テスト、小学部も2学期のまとめの時期に入っています。

寒い時期ですが、体調管理をしっかりして、2学期を最後まで元気に乗り切りましょう!

音楽こぼれ話

<フォーレとプッチーニ>

フォーレはフランス人、プッチーニはイタリア人。同時代を生きた作曲家ではありますが、この二人の間に特に深い親交があったというわけではありません。では、二人に共通していることは何でしょう? 実は二人とも、ちょうど100年前の1924年11月に亡くなっているのです。この11月で没後100周年を迎えたこととなります。

ガブリエル・フォーレは1845年フランスのパミエという町に生まれました。両親は音楽家ではありませんでしたが、我が子の音楽的才能に早くから気づき、9歳のガブリエルをパリの音楽学校に入学させたといえます。その音楽学校の教師陣の中には、有名な作曲家サン・サーンスがおり、生涯にわたって親交がありました。

音楽学校を卒業した後は、マドレーヌ寺院のオルガニストやパリ音楽院の学長など



2学期ミニコンサート(5年生以上)

参加申し込み締め切りは

11月25日(月) です!

参加を希望していて、まだ申し込みを済ませていない人は早めに参加希望票を提出してください。

の重職につきました。作曲活動に取り組む時間は少なかったようですが、夏季休暇中などに集中して作品作りをしました。フォーレの代表作としては、合唱曲「レクイエム」、歌曲「夢のあとに」、ピアノ曲「月の光」、器楽曲「シシリエヌ」などが挙げられます。フォーレは1924年11月4日、肺炎のためパリで79年の生涯を閉じたということです。マドレーヌ寺院で国葬が営まれ、パリのパッシー墓地に葬られました。

次に、イタリア人作曲家のジャコモ・プッチーニ。彼の方が、日本人には馴染みがあるでしょうか。プッチーニは1858年、イタリア・トスカナ地方のルッカという町に生まれました。プッチーニ家は18世紀以来続く、ルッカの宗教音楽家の家系だそうで、立派な生家がルッカの中心部に残り、現在は博物館として公開されています。

ジャコモも最初は教会オルガニストとしてスタートしましたが、ヴェルディのオペラ上演を見て感激し、自らオペラ作曲家を目指すことにしました。1880年からミラノ音楽院に進み、本格的にオペラの作曲技法を学びました。

オペラ第3作目の「マノン・レスコー」が大成功し、その後「ラ・ボエーム」「トスカ」「蝶々夫人」・・・と傑作オペラを次々作曲しました。

ジャコモ・プッチーニはヘビースモーカーだったそうで、1923年末には喉頭癌であることが判明しました。翌1924年、治療のためにブリュッセルに滞在していました。ところが手術後に合併症を引き起こし、11月29日、65歳で亡くなりました。

最後のオペラ「トゥーランドット」は未完成のまま遺されました。フィナーレは友人によって加筆され、現在いくつかのヴァージョンで演奏されます。

プッチーニの遺体は、ブリュッセルからまずミラノのプッチーニ家の墓地に埋葬されましたが、息子アントニオの意志により、ルッカの近くの湖の畔にあったジャコモの仕事場兼自宅に再埋葬されたということです。

没後100周年の二人の作曲家の作品は、年末の演奏会でも取り上げられることが多いのではないのでしょうか。

ほんのちょっとだけ 演奏会情報

11月24日(日) 19時から アルテオーパー・大ホールにて

FREUNDE ORCHESTER の演奏で

フォーレ作曲「レクイエム」

シューベルト作曲 弦楽四重奏曲「死と乙女」ほか